

損益状況(連結ベース)

●FFG連結

(単位:億円)

	平成19年度 中間期	平成20年度 中間期	前年比
経常収益	1,234	1,481	247
業務粗利益	817	927	110
資金利益	665	839	174
役務取引等利益	134	147	13
特定取引利益	3	1	▲2
その他業務利益	15	▲60	▲75
経費(除く臨時処理分)	485	648	163
業務純益	348	416	68
コア業務純益	345	359	13
経常利益	254	188	▲66
信用コスト	60	129	69
中間純利益	127	106	▲21

平成20年度中間期(平成20年9月期)は、米国における金融不安を背景とした金融市場の混乱などの影響を受け、厳しい経営環境となりましたが、「経常収益」は、貸出金利収入など資金運用収益の増強に努めた結果、1,481億円となりました。

「コア業務純益」は、投資信託販売額の減少などによる役務取引等利益の伸び悩みの影響もあり359億円となりました。

「信用コスト」は、福岡銀行で企業業績の悪化などにより増加したものの、親和銀行で貸倒引当金取崩益を計上した結果、129億円となり、株式関係損益の改善などと併せ、「中間純利益」は106億円となりました。

- 株式会社親和銀行(及びその関連会社)の損益については、平成19年度下半期(平成19年10月1日以降)から当社の連結決算に反映されています。
- よって「損益状況FFG連結」の平成19年度中間期には、株式会社親和銀行連結の損益は含まれておりません。

主な指標

(単位:%)

	平成20年 3月末	平成20年 9月末	20年3月末比
不良債権比率 (3行合算+分割子会社)	4.98	4.58	▲0.40
自己資本比率(連結)	8.76	8.92	0.16
うちTierI比率(連結)	5.14	5.39	0.25

FFG3行合算+分割子会社の不良債権比率は、福岡銀行で企業業績悪化などに伴う開示債権残高の増加があったものの、親和銀行において不良債権のオフバランス化を進めた結果、4.58%(20年3月末比▲0.40%)と着実に減少しております。(部分直接償却実施後)

自己資本比率は8.92%(20年3月末比+0.16%)、TierI比率は5.39%(20年3月末比+0.25%)といずれも上昇しました。

総資金(預金+NCD)の状況

総資金(預金+NCD)は、個人預金を中心に積極的な獲得を図りましたが、子銀行の店舗統廃合などの影響もあり、前年比▲982億円の10兆1,599億円となりました。

※NCD…譲渡性預金

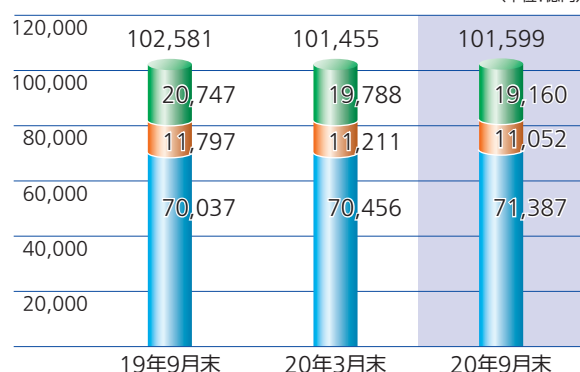
貸出金の状況

貸出金は、熊本ファミリー銀行、親和銀行において、不良債権のオフバランス化を進めた一方で、地元企業や個人のお客さまの資金ニーズに積極的にお応えしました結果、前年比+565億円増加し8兆387億円となりました。

総資金残高(期末残高)

福岡銀行 熊本ファミリー銀行 親和銀行

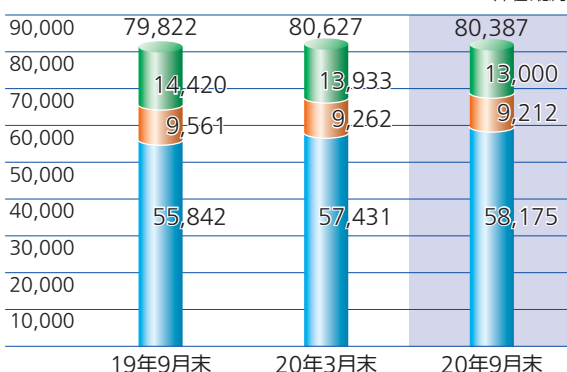
(単位:億円)



貸出金残高(期末残高)

福岡銀行 熊本ファミリー銀行 親和銀行

(単位:億円)



損益状況(単体ベース)

(単位:億円)

	平成19年度 中間期	平成20年度 中間期	前年比
経常収益	1,043	1,038	▲5
業務粗利益	650	615	▲35
資金利益	536	561	25
国内部門	518	528	11
国際部門	18	33	15
役務取引等利益	109	93	▲16
特定取引利益	3	1	▲2
その他業務利益	1	▲41	▲42
経費	373	371	▲1
業務純益	295	210	▲84
コア業務純益	291	298	6
経常利益	83	163	81
信用コスト	11	137	126
中間純利益	47	93	46

「経常収益」は、投資信託の販売額減少による役務取引等収益の減少を主因に、前年比▲5億円の1,038億円となりました。

「コア業務純益」は、上記要因による役務取引等利益の減少を、貸出金の増強などによる資金利益の増加でカバーした結果、前年比+6億円の298億円となり、7年連続過去最高益を更新しました。

「経常利益」は、企業業績悪化などにより信用コストが増加したものの、前年度特殊要因(福岡銀行が持つFFG株式売却による売却損180億円の計上)をふまえ株式等関係損益が大幅に改善したため、前年比+81億円の163億円となりました。

「中間純利益」は、以上により前年比+46億円の93億円となりました。

主な指標

(単位:%)

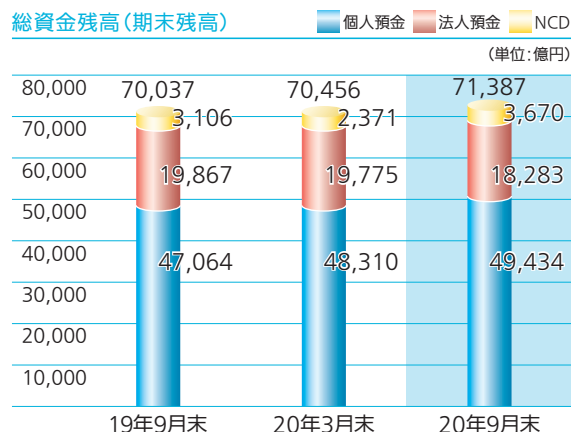
	平成20年 3月末	平成20年 9月末	20年3月末比
不良債権比率(単体)	2.49	2.87	0.38
自己資本比率(連結)	9.61	9.69	0.08
うちTierI比率	8.45	8.68	0.23

不良債権比率は、企業業績悪化などによる新規発生や格下げの影響により、前年比+0.38%上昇し2.87%となりました。(部分直接償却前)

自己資本比率(国内基準)は、20年3月末比+0.08%上昇し9.69%、TierI比率は+0.23%上昇の8.68%となりました。

総資金(預金+NCD)の状況

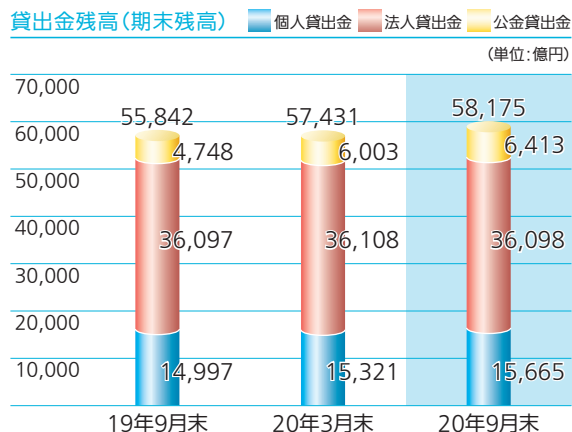
総資金(預金+NCD)は、個人のお客さまからの積極的な預金獲得に伴い、個人預金が前年比+2,370億円増加したことを主因に、前年比+1,350億円増加の7兆1,387億円となりました。



貸出金の状況

貸出金は、地元企業を中心とした新規取引の開拓など積極的な需資の取込みや住宅ローンの積上げを中心とした個人貸出金の推進を図った結果、総貸出金は前年比+2,333億円増加の5兆8,175億円となりました。

(法人貸出金にはFFG向け貸出金(19年9月末1,200億円、20年3月末および20年9月末700億円)、熊本ファミリー銀行向け貸出金100億円を含みます。)



損益状況(単体ベース)

(単位:億円)

	平成19年度 中間期	平成20年度 中間期	前年比
経常収益	175	181	6
業務粗利益	128	120	▲8
資金利益	121	115	▲6
国内部門	121	114	▲7
国際部門	▲0	0	1
役務取引等利益	12	11	▲1
特定取引利益	—	—	—
その他業務利益	▲5	▲6	▲1
経費	91	81	▲10
業務純益	39	45	6
コア業務純益	37	36	▲1
経常利益	▲12	23	35
信用コスト	35	13	▲22
中間純利益	▲20	22	41

「経常収益」は、貸出金残高の減少に伴い、利息収入など資金運用収益が減少しましたが、持ち合い株式の売却などを進めた結果、前年比+6億円の181億円となりました。

「コア業務純益」は、貸出金利息減少による資金利益の減少はあったものの、人件費を中心とした経費削減効果によりこれをカバーし、前年並の36億円となりました。

「経常利益」は、信用コストの減少に加え株式等関係損益の改善(売却益の計上、減損処理額の減少)により前年比+35億円の23億円となりました。

「中間純利益」は、以上により前年比+41億円の22億円となり黒字に転換しました。

主な指標

(単位:%)

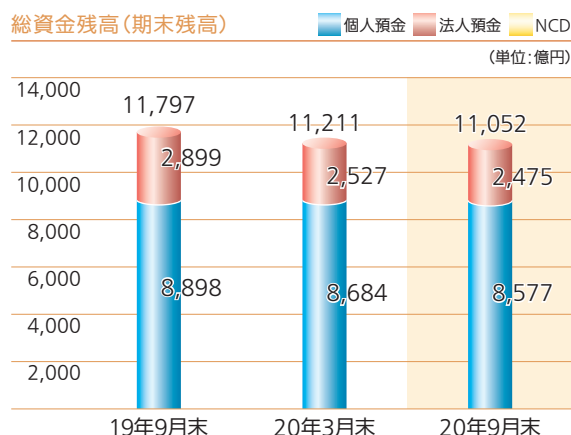
	平成20年 3月末	平成20年 9月末	20年3月末比
不良債権比率(単体)	5.68	5.39	▲0.29
自己資本比率(連結)	6.14	6.54	0.40
うちTier I比率	3.58	3.84	0.26

不良債権のオフバランス化などにより、不良債権比率は20年3月末比▲0.29%低下し5.39%となりました。(部分直接償却後)

自己資本比率(国内基準)は、20年3月末比+0.40%上昇し6.54%、Tier I比率は+0.26%上昇し3.84%となりました。

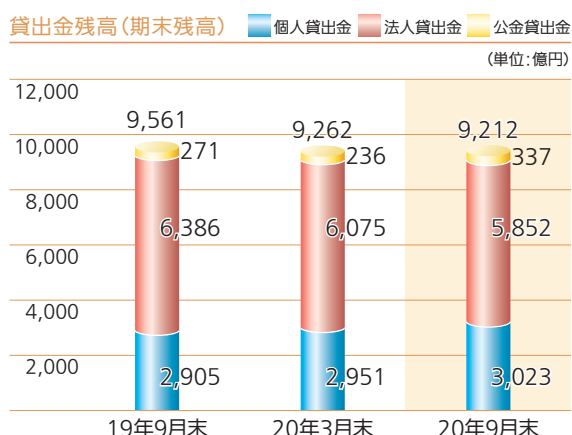
総資金(預金+NCD)の状況

資産運用商品の残高が伸びていることや、店舗統廃合などによる影響もあり個人預金が前年比▲321億円、法人預金も前年比▲424億円となり、総資金残高は前年比▲745億円の1兆1,052億円となりました。



貸出金の状況

個人貸出金は、住宅ローンを中心に前年比+118億円と増加しましたが、法人貸出金は不良債権のオフバランス化などの影響もあり前年比▲534億円となった結果、総貸出金残高は前年比▲349億円の9,212億円となりました。



損益状況(単体ベース)

	平成19年度 中間期	平成20年度 中間期	前年比
経常収益	275	266	▲9
業務粗利益	199	149	▲50
資金利益	185	158	▲27
国内部門	185	156	▲28
国際部門	0	1	1
役務取引等利益	30	25	▲5
特定取引利益	—	—	—
その他業務利益	▲16	▲34	▲18
経費	141	135	▲6
業務純益	▲284	14	299
コア業務純益	61	44	▲17
経常利益	▲922	▲44	878
信用コスト	941	▲35	▲976
中間純利益	▲1,006	55	1,060

(単位:億円)

「経常収益」は、不良債権のオフバランス化などを積極的に進めたことから貸出金利息が減少したことを主因に前年比▲9億円の266億円となりました。

「コア業務純益」は、店舗統廃合や不良債権処理による貸出金利息の減少を主因とした資金利益の減少を経費削減などでカバーできなかったことから、前年比▲17億円の44億円となりました。

「経常利益」は、前年に、FFG基準に統一した大幅な貸倒引当金の積増しを行ったことなどから信用コストが大幅に減少、加えて株式等関係損益も改善した結果、前年比+878億円の▲44億円となりました。

「中間純利益」は、特別利益として貸倒引当金取崩益(87億円)の計上の他、固定資産の減損損失額の大幅な減少などにより前年比+1,060億円の55億円となりました。

●親和銀行の損益は、平成19年度下半期からFFG連結損益に反映されております。よって、平成19年度中間期の損益につきましては、FFG連結損益には含まれておりません。

主な指標

	平成20年 3月末	平成20年 9月末	20年3月末比
不良債権比率(単体+分割会社)	15.73	13.44	▲2.29
自己資本比率(連結)	8.05	8.94	0.89
うちTier I比率	4.45	5.19	0.74

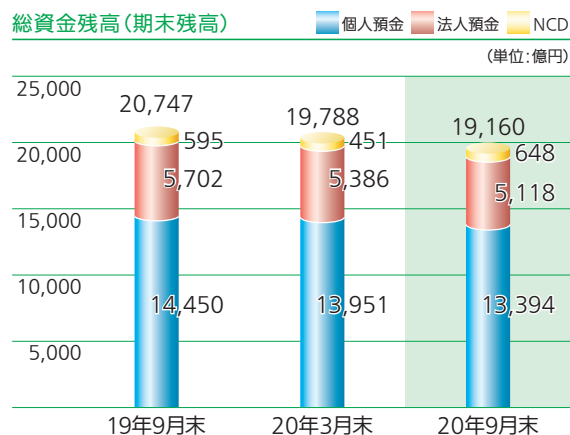
(単位:%)

不良債権比率は、オフバランス化を進めた結果、20年3月末比▲2.29%低下し13.44%と、着実に低下しております。(部分直接償却後)

自己資本比率(国内基準)は、20年3月末比+0.89%上昇し8.94%、Tier I比率は+0.74%上昇し5.19%となりました。

総資金(預金+NCD)の状況

店舗統廃合などの影響を主因として、個人預金が前年比▲1,056億円、法人預金が前年比▲584億円となり、総資金残高は前年比▲1,587億円の1兆9,160億円となりました。



貸出金の状況

個人貸出金は住宅ローンの積み上げを中心に前年比+163億円となりましたが、法人貸出金は店舗統廃合や不良債権のオフバランス化などの影響により前年比▲1,773億円となった結果、総貸出金残高は前年比▲1,420億円の1兆3,000億円となりました。

